

むかし「局アナ」いま「隠居」

ふじ 藤 子



上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住
 ■京都大学農学部林学科卒業
 ■元朝日放送アナウンサー
 ■元池田マルチメディア代表取締役
 ■講演、朗読指導など以外は隠居中



血の繋がった伯(叔)父は、七人もいましたが、女性となると、母方の叔母 藤子(ふじこ)が一人いるだけでした。母とは三つ違いの妹で、一九〇八年(明治41年)に徳島市の佐古町で生まれています。

六人の兄弟姉妹でしたが、上の四人は男で、そのあと五番目が私の母、六番目に藤子が生まれて打ち止めと相成りました。

三つ違いの姉である母にとって藤子は唯一の女姉妹であり、藤子にしても同じでしたから、二人は異常と言えるほどの仲よしだったのです。

二人の父親、つまり私の母方の祖父は三四郎というまるで役者のような名前のすらりとした二枚目でした。背が高く男前の三四郎が、どうして、さほど美人でもなく、金満家でもない私の祖母の婿養子に入ったのか、何となく聞きにくい話で、そのままになってしまったのです。今思うに、聞きそびれた理由は、藤子が父親に似て

美貌の上にスタイルも抜群だったのに対し、私の母は「母親似」で、スタイルも容貌も、藤子に負けていたという厳しい現実があったからかも知れません。



藤子は十一歳にしてこの美形でしたから、ご近所の人たちも、

「この子は大きくなったら別嬪さんになるでよ」と評判で、かなり目立つ存在だったようです。

* 男前で名前もカッコいい三四郎は短命でした。

遺された六人の子供達とは言っても、年の離れた長男が、佐古の美馬儀一郎商店の番頭格だったらしく、その長兄のお蔭で、藤子も私の母も、当時は徳島県的女子として最高学府だった徳女(県立徳島高等女学校)に進学することができたのです。

藤子は、スタイルがいいだけではなく、背が高くて運動神経も抜群だったので徳女に進学するや、早々とテニス部に入り、下級生のときから、代表選手として活躍していました。

大正十年代の城下町で、テニスのラケットを小脇に抱えた袴姿(はかま)の女学生…。

藤子が、どれほど目立つ存在だったことでしょう。「佐古の小町娘」

と言われていたのを耳にしたこともありました。

幼い頃から可愛がってもらった私の身量(みびり)もありませんが、

「普通の小町娘ではなくて、「佐古小町」程度なら、まあエエやろ」と、私は町の噂を素直に受け入れているのです。

* 「藤子さんは、どんなエエトコへ嫁に行くんかいな」

「〇〇はんのボンボンとの話があるんです」と「いや県外の外交官から縁談があったらしいですよ」事実、小町娘を外交官に推薦した御仁がいましたが、

縁談の相手は何といつても外交官でございます。「高等女学校ではアカン」と学歴の問題で断られてしまったと聞きました。

一家の大黒柱的な存在の長兄は小町娘の妹が自慢で、娘のように可愛がっていただけに外交官との破談にはショックだったようですが、見返してやると思ったのか可愛さのあまり高望みして売り惜しんだのか…。

結局、私の叔母 藤子は、当時の差別的言葉で言えば、「行き遅れ」売れ残り」となったあげく、口さがない周りの人の予想を裏切って、やや年の離れた旧制中学の先生と結婚したのです。

藤子の夫「隆文」は一応、教師ですが、心は芸術家。「ワシは絵描きだ」と称する「のんきな父さん」で、私はこのホンワカした雰囲気この叔父が大好きでした。

* 一九四〇年ごろ、何故か隆文叔父は青森県で教師をしていたのです。南国 徳島の親類縁者はお節介でした。

「何が悲しくてそんな寒いところで暮らすの？ 子供が出来んのは寒いからじゃ」
ヤイのヤイのと、喧しく説得を重ねたのです。

私の母も、その中の一人だったに違いありません。

隆文も藤子も徳島の出身だったこともあり、戦時中何かと移動が難儀な中を、伝手をたどって広島市内の中学校に転じたのです。

*

翌、一九四五年八月六日、ヒロシマは世界初の原爆で無差別爆撃を受けました。

隆文、藤子夫婦とも生死不明となってから、何日が経過したでしょうか。

重傷を負った隆文から、一枚の葉書が届き、藤子が即死したと知ったのです。

私にとって唯一一人、血の繋がった叔母は、70年前の八月六日に殺されました。

37歳でした。

やがて：私たちが間借りしていた長野県の疎開先に叔父が姿を現したのです。

ガラスの破片で、背中が傷だらけになった叔父は、骨壺を抱えています。

「子供も居らんし、自分の命もそう長うはないから、藤子の遺骨を、義姉さんの疎開先に近い善光寺さんに納めてもらえたらと思うてここまで来たんです」

*

骨壺の蓋を開けると、母が少し怖い顔をして、「博章はそばへ来たらダメ。あっちへ行つてなさい」



もうこのときは、日本が降伏したあとでしたから、「放射能」が、身体を蝕む恐ろしい「毒」であることが判っていたのでしよう。

大人達は骨壺の蓋を開け、藤子の遺骨を覗き込んで涙していました。小学校六年生だった私は遺骨とも放射能とも対面しないまま別れたことになるのです。

叔父は、妻が死ぬ瞬間の姿を見たと言いました。

「ワシが出勤しようとお靴のヒモを結びよつたんです。ピカッと来たとき、横目で藤子の姿がチラッと見えたけどねえ、藤子はテニスの選手だったほどのさどこい（敏捷な）子オだったけん、サツと身を翻して光の方へ顔を向けた：それが藤子の最後の姿でしたわ」

放射能がたちこめる広島市内の自宅跡の玄関近くを掘ったところ、藤子の骨が標本さながらに横たわっていたという：惨い話でした。

だから私は原爆も原兇も戦争法案も、正当化したくないのです。

*

私たちの仮住まいで傷を癒していた叔父は、数日後、行動を起こしました。

骨壺を抱えて汽車に乗り、善光寺へ向かったのです。

母も私も同道し、遺骨を名刺に納めてきました。

徳島の城下町で小町娘と呼ばれていた藤子の遺骨は、遠く信州 信濃の善光寺で眠っているのです。

口数も少なくなつて毎日横になりがちだった叔父も、

納骨を済ませて気分が軽くなったのか、ある日突然、「博章ちゃん。オジさんは綺麗な景色の絵を描きとうなったんじゃ。野尻湖まで一緒にどうかいな？」

何年前かに私の似顔絵を、油絵で描いてくれた憧れの画家に誘われたのですから、図画が大好きな私は、喜び勇んでスケッチブックと水彩画の道具一式を抱えて野尻湖へお供したのです。

*

野尻湖畔は別世界でした。

小高い丘に腰を下ろして湖面を見渡すと、左の方に外国人の別荘かと思われる瀟洒な家が散在し、湖岸に沿った並木道は、遙か彼方まで続いています。

「日本はホントに戦争してホントに降参したのかな」

夢を見ている気分でした。「必ず神風が吹くと学校で教わつたのに、一向吹かず、原爆が投下されて、叔母の骨が毒を吐き続けている」

そんなことを考えながら、ほんやりしているうちに、画家の描いていた水彩画が完成に近づいています。

ふと気付くと、描かれた並木が妙にひよろりとして、幹の長さが2倍もある。

「オジさん、この樹の幹、長すぎるんじゃないの？」

甥からの素朴な質問に、画家は背中を向けたままこう答えました。

「博章ちゃん。絵は写真と違うんよ。描く人の気持が伝わつたらええ。こう見えたらそう描く。ああしたらええと思うたら、そうする。絵は好きなように描いたらええんじゃ」

この叔父も、数ヶ月後に藤子の後を追っています。

*

平和を取り戻した日本で、初めてピカソの抽象画に出逢つたとき、私の脳裏に蘇つたのは野尻湖の景色と叔父の優しい声でした。

ピカソの「ゲルニカ」は、世界で初めて無差別爆撃を受けた町を描いた絵です。

原爆地獄を体験した彼があの絵を見て何を言ったか。：きつとホンワカした声でこう言ったことでしょう。

「勝つても負けても、戦争はアカンのでよ」